

# 花の教育学的考察

高 田 熱 美\*

## はじめに

文部科学省の学習指導要領（平成 12 年 12 月 14 日告示）は、園児、児童生徒が学ぶべき自然について語っている。

まず、幼稚園教育要領の「環境」において、自然は取り上げられている。すなわち、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。」「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。」「自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。」などとある。そして、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現の基礎が培われることを踏まえ幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」とされる。

小学校学習指導要領においては、自然は「道徳」のなかに見ることができる。

「第一学年及び第二学年」では、その内容に「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。(1) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。(2) 生きることを喜び、生命を大切にすることをもち。(3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。」とある。

---

\* 福岡大学人文学部教授

「第三学年及び第四学年」では、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。(1) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。(2) 生きることが喜び、生命を大切にすることをもち。(3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。」とある。

「第五学年及び第六学年」では、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。(1) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。(2) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重すること。(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。」とされている。

中学校学習指導要領においても、自然は「道徳」の章で取り上げられている。

「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。(1) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。(2) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重すること。(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることが喜びを見いだすように努める。」

このように、学習指導要領は、人間の力としての自然科学が、自然を支配している現今においても、自然が人間の力を超えた存在であることを語っている。教育は、この自然を看過できないのである。

それでは、この自然はどのようなものであるか。指導要領が語る自然は、大きく、美しく、不可思議なもの、偉大なもの、かけがえのないもの、尊いもの、崇高なもの、人間の力を超えたものの謂である。自然はそのようなものとして現れる。自然の具体的なものといえば、それは、動物や植物、それらが生きる海、山、川、風や雲、空、星がまたたく宇宙である。

指導要領は、このような自然から児童・生徒は何かを学ぶことができる、と見ている。それでは、児童・生徒は自然から何をどのようにして学ぶのであるか。

まず、「自然に触れ」「親しむ」ことにおいて児童・生徒は学ぶ。これは、学

ぶためには自然に触れなければならない、ことを意味する。身近な自然に触れるといえば、これは、動物や植物、水、砂、土などに触れることである。

指導要領が、どれほどの意図をもっていかは定かではないが、「直接触れる体験を通して」とあるように、「さわる」のではなく「ふれる」としていることは意味深い。「さわる」は主体の一方的働きかけであるが、「ふれる」は相互の親和的な出会いである。したがって、「触れる」は「親しむ」と同義である。

もちろん、自然には、肌や手に触れることのできないものもある。星や空、雲、宇宙などに触れることはできない。触れる可能性はあるとしても、いま直接触れることはできない。しかし、触れるは、広義の「ふれる」であって、そこには親和的な出会いが含意されているのであれば、人は、星や空、雲や宇宙にも触れることができる。すなわち、星が目に触れ、空が目に触れるのである。わたしが見るのではなく、それらが現れ、わたしの目に触れるのである。そのとき、星、空、雲、宇宙とわたしは、親和的状况にある。ちなみに、「幼稚園」の項で、「自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ」とあるが、これととも、まず「自然に触れる」ことから始まるのである。

ところで、自然に触れるとき、児童・生徒は何を学ぶのであるか。じつは、「触れる」というからには、自分から学ぶことはできないということになる。自然を学ぶのではなく、自然に触れて学ぶというかぎり、児童・生徒のみならず、教師も教えることはできない。触れるということは、意図ないし意志の作用を越えた働きであって、これは児童・生徒と自然との出会いであるからである。

したがって、教える・習うに先行して、触れることがある。ただし、この触れることは、意志によるものではないので、とりもなおさず、自然と共にあること、自然に触れる場に居合わせることが基点になる。これによって、触れることが可能になる。

指導要領は、「自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して」「心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、表現の基礎が培われる」と見る。

自然に触れることは、このように、豊かな学びを培うという。たしかに、動物や植物に触れることは、「優しい心」を育む。自然の大きさは、心にゆとりや安らぎを、美しさは、「すがすがしい心」や「感動する心」を、自然の崇高さは、「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」を呼び起こす。さらに、そこから、生命の「かけがえのなさ」や「生きることを喜び、生命を大切にすること」が萌え出る。

指導要領は、反転して、自然を知り、自然が人間に与え育んだものを、自然に返すように説く。すなわち、動物や植物に優しくすること、自然を大切にすること、愛護すること、自他の生命を尊重することなどを説いている。ただし、これは蛇足というべきであろう。自然に触れ、自然との出会いにおいて生まれるものは、意図的に、教えられるものではなかったからである。教育ができることといえば、子どもが自然に触れることができるような状況をつくる、ということである。ここで生まれた学びは、自ずから、指導要領がねらったような結果に至るのである。

自然に触れる場に居合わせるというとき、幼児においては、動物や植物に触れる場に居るということであろう。海、山、川に触れるというとき、子どもは、水や樹木、そこに生きるヤドカリやフナ、カブトムシやチョウ、菜の花や桑の木に触れるのである。子どもは、海や山そのものに触れるというのではない。まして、星空とか季節の移り変わりに触れるわけではない。これらに触れることができるのは、高学年になってからである。もちろん、触れるとは、象徴的な意味で触れるのである。すなわち、星の瞬きに触れ、宇宙の音に触れるのである。

子どもは自然に触れるとき、たちどころに自然とのあそびを創造する。幼い子どもは、とりわけ、カニ、メダカ、クワガタ、イヌなど動く生き物とあそぶのである。これらの生き物たち、なかでも目玉のくっきりしているキンギョ、カエル、イヌ、ウマなどは、もの（者）としての他者である。庭先の青ガエル

を指して、「青い服を着たおじちゃん came。」と母親に告げる子がいる。ウマは、「ハイハイしているおばちゃん」である。牧場にいるウマをまじまじと見て、そこから離れない子がいる。なんと、おもしろい、かわった顔のおばちゃんだろう。

ところが、子どもと植物との遊びはすくない。子どもは花と戯れることはない。花には戯れをためらわせるところがある。花に現れている美しさがそうさせる。美しさにおいて、いかなる動物も花に及ぶものはいない。花は美しい。花は、さわり、戯れるものではなく、そっと触れるということにおいて、いつくしみ、愛でる存在である。愛でることによって、心が安らぎ、心が美しくなる。むしろ、愛でるとき、すでに美しい心がある。美しい花と美しい心が触れ合うのである。

それにしても、花とは、そもそも、何であるか。もちろん、これは、花を自然科学の対象として問うのではない。自然科学は、花を細部に分割するので、花自体を問うことはできない。ここでいう問いは、花そのものとしての花の現象を問うのである。この現象を問うことにおいて、花の教育学的意味を明らかにする。よって、花の教育学的考察が、本稿のテーマである。

## 1 子どもの自然

文部科学省の指導要領は、「身近な自然に親しみ」という。だが、現在、「身近な自然」などはなくなりつつある。かつて、文部省唱歌や大正期に数多く生まれた童謡には、自然が豊かに詠われていた。それは、自然が身近にあったことを語っている。

この自然の何が詠われているのか。これは、子どもがどのような自然に触れ、どのように親しんでいるかを明らかにする。

日本の唱歌や童謡集をひもとくと<sup>1)</sup>、動物が詠われている。ちなみに、哺乳類では、イヌ、ネコ、サル、ウサギ、キツネ、タヌキ、ウマ、ヤギ、ヒツジ、

ゾウ、ラクダ、ライオン、トラ、鳥類では、ハト、カラス、スズメ、ヒバリ、カモメ、トンビ、ウグイス、モズ、ホトトギス、カッコウ、カナリア、クイナ、ウ、チドリ、カリ、爬虫類ではカメ、両生類はカエル、オタマジャクシ、魚類には、コイ、フナ、メダカ、キンギョ、ドジョウ、昆虫に、チョウ、トンボ、ホタル、セミ、コガネムシ、スズムシ、マツムシ、甲殻類に、カニ、エビ、軟体動物に、カタツムリ、サクラ貝などがあつた。

植物についていえば、花では、サクラ、ウメ、モモ、スマレ、レンゲ、キク、菜の花、卵の花、チュウリップ、橘、ボタン、月見草（宵待ち草）、アカシア、ツバキ、ジャクナゲ、ミカンの花、水芭蕉の花（厳密には花ではないが）、などが詠われていた。そのほか、イチョウ、マツ、ポプラ、スギ、イネ、チャ、ムギ、ヤナギ、ツタ、カエデ（紅葉）、ハゼ、クワの実、どんぐり、クリの実、カキの実、などがある。

自然一般として、春夏秋冬、月、太陽、海、山、川、雨、風、雲、雪、夕やけ、などがあつた。

これを見ると、動物にくらべて植物はすくない。動物は、子どものあそび相手になるからであろう。子どもは動物を飼いたいという。これに対して、子どもは植物を育てたいとはいわない。大人が、勧めて育てるように仕向けることはあつても、自分のほうから育てる子どもはすくない。

植物、とりわけ花は、あそぶものではなく、ながめ、愛でるものであつた。あそぶと花は壊れてしまう。花そのものがあそびを拒むのであつた。子どもは、花ではなく、ほかのものを求めて野や山に分け入つた。どんぐりを遊具にするため、クワやクリの実、野いちごなどを食べるために、入つたのであつた。

唱歌や童謡に木の実を詠つた人たちは、幼いころの自分の体験を映しているのであろう。楽しかった思い出を語っている、といえよう。だが、花については、大人になつた人たちの美意識が映し出されているのではないか。子どもは、まだ、花の美しさを感じ、愛でるところまで育っていないからである。子ど

もは、花より雪や雨、風、川、海、山のほうが楽しいのであった。花に思いを入れるようになるには、時をまたねばならないのである。

## 2 花の文化

古生物学の知見によれば、発酵する細胞、光合成をする細胞、呼吸をする細胞が順次現れ、それらが共生・合体しながら進化したという。やがて、12億年前、植物細胞と動物細胞が生まれる。植物細胞は、細胞の共生態が光合成をする藻類を取り込んだものである。藻類は葉緑体などの色素になって、光合成を維持したのである。他方、動物細胞は、藻類が輩出した酸素の毒に脅かされていた先住の細胞が、呼吸する細胞と共生し、それを取り込んで生まれたものである。呼吸する細胞はミトコンドリアになって、新しい細胞を維持する。

細胞の合体・摂取がさらに進む。そして、細胞の遺伝子が互いに混ざり合い、それぞれの遺伝子を半数づつもった細胞が現れた。生殖細胞の出現である。

生殖細胞は、新しい生命を生み続け、生命を多様化する。6億年前に、多細胞生物が現れる。この多細胞生物は、下等なものは出芽などで増殖するが、それ以外は体細胞と生殖細胞をもって、進化の速度を速めた。生殖はふたつの個体から新しい第三の個体を創造する。同時に、この生命には死がある。生殖によって進化する生命の必然的帰結である。

多細胞生物のなかには、海や干潟や沼を出て、陸地へ上がるものが現れた。光合成を行う多細胞生物（植物）は、地殻の変動、水分の蒸発などで、陸地に触れたとき、光合成をいままで以上に盛んにし、大地に根を張り、繁殖を進めた。これは、移動に要するエネルギーから解放されているため、大地全体を覆うほどに繁殖する。また、呼吸をする多細胞生物も、陸地に触れるにつれて、それに適応し、多様化する。海にいた節足動物は昆虫などに、魚は両性類や爬虫類へと進化していく。

5億4千3百年前、カンブリア紀、大気が光で明るくなったころ、映像を見

る眼が発生したという<sup>2)</sup>。つづいて、多様な色彩をもった生命が生まれる。顕花植物が現れ、昆虫が受粉を促し、果実ができる。

2億年前に出現した哺乳動物の一部が、7千年ほど前、樹上に移り、食虫から果肉を食べる方に変ったという。この時期には、夜間から昼の生活に移行しており、色のついた果実を見分けることができたのである。このような生活は、たんに、眼を発達させただけでなく、手、腕、胸、脚などを変え、行動を豊かにしたのである。

だが、これによって、遠い人類の祖先たちが、花に特別の関心を示したわけではあるまい。示したとすれば、その後実る果実であったであろう。現在の日本ザルやチンパンジー、ゴリラ、オランウータンなどが花に興味、関心を示したという事例はない。

R.H.ソレッキの調査によると<sup>3)</sup>、6万年前、イラク北西部、ネアンデルタール人が住んでいたというシャニダール洞窟には、傷を負った死者を埋葬した形跡があるという。その盛り土の表層部には多量の花粉が見られたことから、ソレッキは、これをネアンデルタール人の墓と見なし、花粉は手向けられた花々であると認識したのであった。

しかし、それにしても、なぜ、花がささげられたのであるか。献花は、その花粉からタチアオイやノコギリソウの花であったことが特定されたが、これらは、イラクでは、いまも傷を治す薬草に供されているという。とすれば、ネアンデルタール人は傷を負って逝った者への薬用として墓に手向けたのであるか、それとも、なにか呪術的な意味があるのか、定かではない。

花に人びとが関心をもつのは環境と文化による。花のある環境、そして花を生活の中に定位する文化があって、はじめて花がそれ自体として顕わになる。ここで、人は、花を何かのために用いる、すなわち何かの手段にするのではなく、花そのものを愛でるのである。

たしかに、花は、装飾ということを広義にとれば、ヒスイやダイヤ、黄金な



どと同じように、装飾のために用いられる。だが、花は、貴金属で身体や部屋を飾ることを超えている。ダイヤの首飾り、黄金の部屋は日常を超えることはないが、花は日常のなかに超越的なものをもたらすのである。それゆえに、花は、宗教のなかに定位されている。棺に安置されている死者は花のなかで眠りにつくのである。

花が文化のなかに定位されているということは、そのことが学ばれてきたということである。花が、日常の生活であれ、非日常の冠婚葬祭であれ、そこに供されるのは、人びとが、花の存在を感受し、学んだからである。

それでは、どのようにして、人は、存在としての花を学ぶのであるか。「花は美しい」という。「汚い」とはいわない。このことは衆目の一致するところであろう。「花は美しい」とは、どのようにして学ぶのであるか。

「美しい」ということは事物ではない。花は、やわらかい、あかい、におう、などといったことは五感でとらえることができる。「美しい」は五感に触発されながらそれを超えた象徴的ことばである。ここには、感情ないし感動がこもっている。これら感情ないし感動は、花と人との出会いによる。この出会いは、人と人との出会いが喚起する。出会いは、交わり、交わりの親和である。したがって、「美しい」は、親和のなかにある人と人との交わりにおいて学ばれるものであろう。幼い子の手をひいている母親が、さくらの花をみて、立ちすくみ、「美しい」と感嘆の声をもらす。この時の母親の声、うっとりした喜びの表情、仕草、一瞬の沈黙、これらのなかに、子どもは「美しい」が何であるかを感受するのである。

「美しい」は、悦び、幸せ、安らぎの感情を生むなにかである。ちなみに、かのナイチンゲールは、花について、こう語っている。「笑うだけの体力もないばあいもあるが、そのとき患者に必要なものは、自然が与えてくれるあの感銘なのである。」すなわち、花、「その形や色彩は、いかなる議論や詮索にもまして、患者から苦悩をぬぐい去ってくれる。」<sup>4)</sup>

それにしても、なお、問いはのこる。なぜ、ほかならぬ花は、このようなものとして「美しい」のであるか、と。この新たな問いは、花という存在そのものへの問いを立てるのである。

### 3 花の存在論

花は生活のいたるところにおかれる。居室、庭、公園、病室、学校、オフィスビル、そして冠婚葬祭において、花を見ないことはない。ここに、花が在るということは何であるか。花が在るということは何を現しているのか。無論、この問いは、花をここに置いた人の意図、すなわち花の効用としてのストレス解消や気分転換などを問うてはいない。花そのものを問うことは、花が花として現れることを問うのであり、これは、自ずから、現象学的問いに誘うのである。

いま、ここに、花が在る。ここには、時間の流れはない。時間は止まっている。時間が止まることは運動がないということである。これは静寂である。花が在るということは静寂である。花は静寂として在る。すなわち、花は、あせらず、あくせくと、せわしなく何かを追うこともない。花は目標をもたないものである。

これに対して、動物は動く。食を求め、仲間を求め、敵から逃れるため、動き、走る。動物は、何かを求め、何かをする。たしかに、花も温度によって開く。日陰を避け、日向に向かう花もある。だが、これは、天と地の恵みを花が受容することによる。まさに、野の百合は、労せず、紡ぐこともなしに、咲くのである。

現代の文明は、欲望をできるだけ速く充足することを目的としている。人は、目標を定め、外界に働きかけ、たえず時間を気にし、動き回り、疾走している。これは、時間空間の克服を第一義とするようになる。このような状況において、花は、動かさず、働かず、ただ、いま、ここに、在る。ここには、静寂と沈黙がある。花は何も語ることはない。外界に対して、花は閉ざされている。

花は、なにも語らぬことにおいて、何かを語っている。花である存在の逆説がここにある。すなわち、花が在ることにおいて、不可思議な、名状し難い、神秘的な何かが現れるのである。花は、その存在において、神秘である。

花は、なぜ、いま、ここに、在るか、と問われても、それに答えることはない。ただ、在る、というほかはない。花は、あらゆる問いを虚空に去らしめるということにおいて、謎ではなく、神秘である。謎は、どうして、なぜ、と問い、探求することができるが、存在の神秘はそれを超えている。この点で、動物は謎の地平にある。この動物は、なぜ、ここにいるのか、獲物を求めてか、敵から逃れてか。これは解くことができる。動物に神秘が現れることはない。架空の龍や獅子においても、そうである。

人は神秘を見ることはできない。人はそれに触れるのである。人は花を見る。その見ることにおいて、神秘に触れるのである。神秘を見るのではない。神秘は知覚の対象ではないからである。神秘は、存在するものではなく、存在そのものの開示である。したがって、花から、いわば、花を介して神秘が現れるのではなく、花そのものが神秘として現れるのである。

花は、外に向かって働くこともなく、外からの働きに抗うこともない。花は世界を受容する。このような花を人は見る。見るは一方的働きである。ところが、この一方性は花に吸収され、触れることに転換する。この触れることにおいて、見る主体（わたし）と見られる客体（花）の分立が消滅する。したがって、ここでは、花を問う主体も消滅する。この時、謎が去って神秘が立ち現れるのである。

ちなみに、触れるは、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、などと違って、主客未生の場にある感覚であった<sup>5)</sup>。触れるは相互的感觉である。触れるということは、私が触れると同時に私が触れたものが私に触れるということである。それゆえ、私は風に触れ、風は私に触れる。私はせせらぎに触れ、せせらぎは私に触れるのである。

花が目に触れたとき、人はその美に打たれ、呆然と立ちつくすことがある。呆然とは、私が、ここから去ることである。去った私は美のなかに在る。美は、分析できない何かであって、そこに人があるとき神秘に触れているのである。

人は、美に触れてたたずむ。静寂が現れ、花と人は静寂を生きる。一瞬の静寂に神秘が現成する。これに対して、動物は神秘としての美を現すことはない。動物の前に人は呆然とたたずむことはない。動物は何かを求めて動く。目はたえずそれを追う。極楽鳥のような華麗ともいえる鳥でさえも、神秘が現れることはない。

もちろん、神秘は花の属性ではない。また、花のなかに神秘が現れるというのではない。そうであれば、神秘は、花の外にあって、外から花のなかに進入したことになるであろう。花そのものが神秘である。花が在るということが神秘なのである。人が、この花に触れるとき、突如として、花は神秘を現すのである。

存在は神秘である。存在は、神秘である花そのものとして、いま、ここに、在る。これは、日常を超えて在ることの、日常における開現である。花は、動かさず、喧騒に関わらず、ただ、在る。かくして、花は、日常にあって、日常性を消去するのである。

日常において、人は、花を見る。病人の見舞いにどれが良いか、誕生日のお祝いにはどれにしようか、など、値段を勘案しながら見る。だが、花そのものは、日常性を消す。超越的であることにおいて、花は、冠婚葬祭に供される。祝祭が、正であれ、負であれ、祝祭の神秘性に呼応して、花は供される。葬儀においてさえも、柩に横たわる死者に、人は花を献じるのであった。これは、死の神秘を開現する。永遠の眠り、静寂、沈黙は死と花の神秘を現している。

神秘は、花や樹木のような、具体的に有るものとして現れるものであった。これは、いかなる志向性をも現してはいなかった。神秘は有るものの内に秘せられている。したがって、花は、対自ではなく即自的である。それゆえ、花は、

外面性ではなく内面性である<sup>6)</sup>。

『字通』(白川静)によれば、語源に従うと、花は華であったという。華は、華やかなの謂いである。華麗、栄華、華美、精華、光華という。これを見れば、花は、華やかであるという意味で、外面ないし外向的であるかに見える。だが、この華は、それを誇らず、誇示せず、ただ、ここに在るということにおいて、内面的である。いかなる花も内面性を脱することはない。

内面性は外へ向かって拡散しない。拡散は分裂を惹起する。内面性は、凝集、秩序、統一、調和である。かたちからいえば、調和は、鋭角からなる三角形や四角形ではなく、円である。

円がそうであるように、内面性としての調和は左右対称性である。花は左右対称性において調和である。これに比して、動物においては左右対称性が崩れている。とりわけ、活動的動物にはそれが言える。人においては、利き手があり、右と左の手の形、機能には違いがある。顔、目、口にさえも差異がある。

花の対称性、調和は、静止、静寂となって、日常の時間空間を突き抜けて、超越的存在を開示する。それは一瞬のことである。超越は一瞬であることにおいて、一瞬は永遠である。それゆえ、花は、その生命の短さにもかかわらず、いな、それゆえに永遠なのである。

花は、対象としての事物でもある。植物学や栽培学の対象であり、花売りにとっては品定めと売価の対象である。部屋に活けられ、部屋を飾るものでもあった。だが、花は、事物としてではなく、状況になかにあって豊かな意味を生成する。赤い花、白い花、大きな花、小さな花、いずれも、受容、即自、自足、調和、柔和、静寂、内面性として超越、すなわち永遠即神秘の位相を、ひと時、垣間見せる。人は、この時、その位相に触れる。かくして、花は日常生活のなかに安らぎをもたらすのである。

花の神秘性は、幼い子どもから遠いところにあった。子どもは、世界の事象に驚異を抱く。驚異は不思議さを喚起する。不思議さは問いを喚起する。なぜ、

ゾウさんは大きいのか、なぜ、火は熱いのか、なぜ、電車は走るのかなど、子どもは問いをくりかえす。しかし、神秘は対象ではない。神秘はなぜと問う対象にはならない。なぜは、原因と結果を浮上させる問いである。神秘は、むしろ、何であるかという問いに関わるものである。しかし、この問いは神秘を対象と見ることではない。これは不可能なことであった。そもそも、問いは言葉によって進められるのであったが、神秘は、言葉を超えている。神秘は語るができないのである。それゆえ、神秘が何であるかを問いつつ、突然、その問い、したがってそれを問う自己を放擲して、神秘のありのままを受容する時、神秘は現成するのであった。

ちなみに、神秘といえば、仏像にも現れている。もっとも、金剛力士像のような、躍動する像に神秘が現れることはない。この像は、眼を見開き、口をあげ、姿勢は左右非対称で、まさに動かんばかりであり、見る者を威圧するところがある。これに比して、如来像、観音像、菩薩像などは、内面、即自、調和、静寂、沈黙、神秘として、在る。これらの像は、眼をとじて、眠っているかに見える。見る者に働きかけてはいない。そのような意思も見られない。花と同じように、やわらかく、丸みを帯びた身体、柔和で、穏やかな表情がある。

人は、このような像に出会った時、言葉を失って、沈黙する。神秘的な何かに、人は触れたのである。かくして、人は、足をそろえ、頭をたれ、眼を閉じ、両手を合わせる。沈黙と対称的姿勢、これは祈りへの没入である。

#### 4 花の教育論

静寂は、たんに物音がないということではない。動きを見ることのできない夜にも静寂はある。小波光る昼間よりも、夜の海や湖、池、沼などに静寂はある。夜の森や山にもそれがある。古来、わが国においては、これらには神々がましますのであった。

本来、花はこうした自然のなかにあったが、人間の文化は、この花を日常の

なかに定位して、安らぎを生み出した。さらに、日常性を脱して、祝祭を豊かにし、ついに超越的なものを開示したのであった。

そうであるからには、花は、教育のなかにも定位されうるものである。たしかに、幼稚園においては、動物の飼育のほかに、庭に花が育てられていることが多い。花園や花壇は、小学や中学校にもある。

だが、花は、児童・生徒に特定の働きかけをすることはない。花は、柔和で、傷つきやすく、さわると、散ってしまうような、はかない存在である。花にはさわりたいところがある。はかなさが花の花たる所以である。

じつは、このはかなさが花の神秘性である。神秘は、触るものではなく、触れることにおいて顕現する。触るとき、神秘は消滅するのである。すでに見たように、触れるは、主体—客体という対自的関与を消している。触れるは、何とはなしに、手に触れる、眼に触れる、というように、主体を放下することである。ここでは、花は、事物として志向されてはいない。花の神秘は、この触れることにおいて、顕になるのであった。

かくして、花を教育のなかに取り入れ、花を愛で、花の命をいつくしむように、教えるなどというのは徒労である。これは、願いであって、意図して教えられるものではない。

ゆえに、花の神秘は、触れることにおいて顕現するのであれば、児童・生徒は、花にふれることができるような場に居合わせるほかはない。教育は、暗黙のうちに、そのことを了解していて、教室、校庭、廊下、玄関などの各処に花をおいたのである。児童・生徒が気づこうが気づくまいが、花はある。そして、あるとき、思いがけなく、子どもたちは花に触れる。この時、花は、美しいとして、神秘が現れるのである。

花を愛で、花は美しいとして感動する人びとは少なくない。子どもたちの親にも教師にも、そういう人は沢山いる。「美しい」ものに触れ、このことに感動する心に、子どもたちが触れるとき、子どもも、また「美しい」ものに触れ

る。一旦、「美しい」ものに触れると、あたかも、美しいものと子どもとの間に一本の線が繋がったようになって、両者の交流が可能になる。こうして、美しいものは、あらゆる人びとに触れ、交流し、あらゆる人びと相互の交流をも進める。

花の美しさは、貴金属と違って、長期にわたって所有されえない。花の美はひと時である。このひと時が超越かつ永遠的である。それゆえ、花の美はあらゆる人びとに開かれている。このことは、花の内面性、即自性に矛盾しない。そうであるからこそ、花の美は、特定のだれかれではなく、すべての人に開かれている。これによって、人は、私的所有、日常の欲望を離れて、超越的気圏に触れ、世界と和解し、安らぎをえるのである。

かくして、子どもは、花を愛で、いつくしむ人に出会って、その人に触れ、さらに花に触れる場に居合わせることが望まれる。花をいつくしむことは、このような状況において育まれる。この意味で、花に触れ、花に学ぶことは間接的である。間接的であるため、花は、教育の射程に入り難いのである。だが、そうであるからこそ、花は、人間の育成において大きな意味をもつ。花は、無限の動因である欲望、それが動かす目的志向的日常を裂開し、一瞬のうちに、永遠の神秘を垣間見せ、ひるがえって、日常を豊穡ならしめる。花は、真に生きること、すなわち真の自己へ転回させるのである。

## 注

- 1) 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』岩波書店 昭和33  
佐野靖『心に響く童謡・唱歌』東洋館出版社 2000年
- 2) A. パーカー『眼の誕生』渡辺政隆・今西康子訳 草思社 2006年 p.342
- 3) R. S. ソレッキ『シャニダール洞窟の謎』蒼樹書房 1977 参照
- 4) F. Nightingale: Notes on Nursing, 『看護覚え書』湯浅ます他訳 現代社 2000,  
p. 107-108



- 5) 坂部恵『「ふれる」ことの哲学』岩波書店 1983, p. 26
- 6) F. J. J. Buytendijk : De vrouw, 『女性』大橋博司・斉藤正己訳 みすず書房、1977, p. 187-225